

## 南洋の桃太郎——民話、植民地政策、パロディ

ロバート・ティアニー（大崎晴美訳）

1880年代以降の作家たちは、日本は南洋との交易を拡大すべきという見解をしばしば口にしていた。当時南洋は、長きにわたって西洋の帝国主義諸国に支配されてきた地域であった。20世紀初頭までには、日本の目標は、交易関係の進展から、征服や移住による国家の領土拡張と影響力の拡大という、より攻撃的な衝動に突き動かされたものへと変化した。歴史学者・清水元<sup>1</sup>は、この時期の「出版物やステレオタイプやスローガンのとめどない氾濫」が「南方への進出に賛同する明々白々なムード（南進論）、つまりは南洋熱の発生」<sup>1</sup>をもたらしたと記している。これらの「出版物やステレオタイプやスローガン」は、突如としてどこからともなく現われたわけではない。むしろそれらは、大日本帝国の南洋への大規模な進出に伴って現われた。第一次世界大戦の開戦後すぐに、日本はドイツの統治下にあったマイクロネシアの島々を占領し、後に国際連盟委任統治領として支配した。日本の商社は、戦争によりヨーロッパとその植民地との間の貿易が途絶えた機を捉え、東南アジア全域にわたって交易と投資を拡大した。

日本本土では、1914年の東京大正博覧会により、南洋に対する人々の意識が否応なしに高まった。この帝国博覧会では、史上初めて南洋のパピリオン（南洋館）が呼び物とされ、そこには熱帯の物産の展示や、「喰い人種」[訳者註記「人食い人種」に対する当時の呼称]を目玉にした人間を見世物にする展示がひしめいていた。雑誌『実業之日本』の記者は、これらの人食い人種が「実際に接すると「如何にも従順」であり、人食いといっても過去のこと」だったと記していた<sup>2</sup>。にもかかわらず、柔順にされてはいるとはいえ生きた人食い人種の展示は、多くの観客をパピリオンに集めただけでなく、彼らが抱いていた、原始的な南洋島民というステレオタイプを強化する役目を果たしもした。

南洋へのこうした心酔は、20世紀初頭の日本小説の数々の代表作の中に垣間見られる。田山花袋の1907年の小説『蒲団』の主人公・竹中時雄は、作家を志す女弟子・芳子への恋慕の情から逃れるために、「寧ろ南洋の植民地に漂泊しよう」<sup>3</sup>と夢想する。夏目漱石の1912年の小説『彼岸過迄』の主人公・田川敬太郎は、児玉音松<sup>おとまつ</sup>のボルネオ冒険談<sup>4</sup>を熱心に読み、自分が護謨林の栽培監督者になって、「果しのない広野を埋め尽す勢いで何百万本という護謨の樹が茂っている真中に、一階建のバンガローを拵えて」<sup>5</sup>いるのを想像する。日本の南進が、

1  
Shimizu Hajime, 1987, p. 388.

2  
『実業之日本』1914年。土屋、2002年、257頁での引用。

3  
田山花袋、1973年、548頁。

4  
児玉音松は、20世紀初期に南洋を旅した探検家であった。彼の著作『南洋』は当初、漱石の小説と同じ年、1912年に東京朝日新聞への連載として世に出た。

5  
夏目漱石、1952年、16-18頁を参照。

6

志賀の小説は1921年に連載を開始したが、この箇所では述べられていることはおそらく、1914年の東京大正博覧会を指している。志賀、1955年、224頁。

7

鶴見、1917年、序5頁。

8

同書、5-6頁。

自分の作品の主人公の青年が夢想する生活をどのように形づくっているかを漱石が示しているとすれば、志賀直哉は、1921年から1937年にかけて『改造』に連載した『暗夜行路』で、日本国内の人々の日常生活の中にあるスペクタクルとして南洋を描き出す。この小説中で、主人公・時任謙作の友人の青年・宮本は、土人の踊りを見に、前述の南洋館を何度か訪れている<sup>6</sup>。最後にもう一つだけ例を挙げるなら、谷崎潤一郎は1910年、彼がまだ青年の頃に、『象』という一幕劇を発表する。この劇は、インドと中国の間にある東南アジアのさる王国から送られた象を引き連れた行列に対する、江戸庶民の反応を描いたものである。この作品は、徳川時代(1600-1867年)の初期を舞台としたものだが、また20世紀初期の南進論の言説の戯文でもある。

図版をふんだんに盛り込んだ鶴見祐輔の『南洋遊記』は、南進論の著作の極致を示している。鶴見はこの作品の序文で、日本の青少年の間に帝国主義を支える感情的な傾向を培うよう作家たちを促している。南洋における日本の帝国主義の企ての成功は、「国民の主観的な態度」<sup>7</sup>にかかっている、と彼は力説する。

今や我国に於て南進論の声は漸く旺であつて、…甚だ慶すべき事であるけれど、単に殖産、移民と言ふ如き理知より来る、南進策のみでは未だ充分であり、完璧であると、自分は考へる事が出来ないのである。更に、南国に対する興味と憧憬とを刺戟するので無ければ、我々が意を安んじて、墳墓の地と為す丈の心構へは起つて来まいと思ふのである。…而して、此の一味憧憬慕望の情の湧くのは、空想の旺な直覚力の鋭い少年時代、青年時代であらうと、自分は思ふのである。…帝国主義は揺籃の中に在る、少年の夢に通ふ、異郷外域の風光は、之れ懸、日本民族膨張の礎石と為るのである<sup>8</sup>。[訳者註記 『南洋遊記』からの以上二つの引用箇所では旧字を新字に改めた。]

日本の「開国」とは、それ以後外国人が日本にやってくるができるのを意味しただけではなく、日本人が海外に行って定住できることを意味してもいた。ただ鶴見は、実際問題として、ほとんどの日本人は「父祖伝来の地」を捨てるのに抵抗を感じ、純粋に知的な議論によってこの抵抗を克服することはできないだろう、と認めている。人々が海外に移住できるようにするには、彼らの中に異郷の地への欲求を掻き立てるよう手を加えなければならない。逆に、「異郷への憧憬」を誘うために、作家は読者の想像力に訴えなければならない。最後に肝心なことを付け加えるなら、読者の想像力に触れるのに最良の時期は、彼らがまだ「揺籃」の中にいる時だとされていた。

## 民族的帝国主義の創出

教育者が子供の想像力に働きかけるのに、おとぎ話や民話の宝庫を見逃す手はなかった。明治国家が国内政治における政府の正当性を確立するのに皇国神話を利用したのと同様、教育機関では、日本全国にわたって南進政策の支持層を形成するために民話が再利用された。民話は、国民文化の他の領域と同じく、日本の青少年の修養という用途に当ててことを求められた情報源の一つであった。

『桃太郎』は最も典型的な日本の民話で、教科書に出てくる標準版の物語は以下の通りである。田舎に住む老父と老婆が、川を流れてきた桃の中から赤ん坊の桃太郎を見つける。桃太郎は大きくなると、鬼ヶ島征伐の旅に出て、犬、猿、雉という三匹の動物を手下にする。彼は屈強な鬼の固い守りを打ち破り、宝を手にして意気揚々と自分の村に凱旋する。『桃太郎』をただ単に拡張主義的なものとして取り上げるのはフェアではないだろう。にもかかわらず、教育者も政治的なデマゴグもこぞって、この一見罪のない物語の中に、帝国主義的な意識を日本の青少年に植え付けるための絶好の道具を見出した。

『桃太郎』は、1888年に初めて小学校の教科書の中に登場し<sup>9</sup>、これを通じてこの物語の標準版が日本中の子供たちに広まった。国家のお墨付きを得て標準化されたこの『桃太郎』は、明治時代中期の創作物であるが、それが1945年まで日本の教科書の中で定番であり続けた。1890年代から既に数多くの作家が、武勇の士の鏡として、また帝国主義国家の象徴として、桃太郎を描き始めていた。巖谷小波の『桃太郎』(1894年)では、桃太郎は「元来此日本の東北の方、海洋遙かに隔てた処に[ある]、鬼の住む島」に送られる。この作品には、「其鬼心邪にして、我皇神の皇化に従はず、却て此の芦原の国に寇を為し、蒼生を取り喰ひ、宝物を奪ひ取る」<sup>10</sup>とある。巖谷が鬼を中国の清と同一視したのに対し、他の作家たちは鬼ヶ島のありかを当時の南洋に求め、桃太郎を帝国主義者として描き始めた。例えば、1893年に出版された『桃太郎の話の寓意』の作者は読者に対し、桃太郎を見習って、「赤道を越えて濠太刺利辺の島々へ渡り、鬼ヶ島よりモツト良い所を攻め取て、其土地の鬼の如き黒奴を服従せしめ、椰子の実や、真珠の宝物を沢山本国へ持ち運ばせる」<sup>11</sup>よう勧めている。1895年に少年向け雑誌『少年世界』に掲載された「今桃太郎」では、桃太郎は日本の大将で、鬼ヶ島は当時日本の植民地になったばかりの台湾、鬼の宝物は台湾の砂糖きび産業ということになっている<sup>12</sup>。だが、著名な作家たちがこの民話と大日本帝国の拡張の間の関わりを示す理論を發展させたのは、20世紀の最初の20年間—南洋熱の時代—なのである。この時期以降、桃太郎は青少年が見習うべきお手本となった。桃太郎の鬼が島遠征は、日本の海外進出、とりわけ南進の比喩と見なされるようになった。

9

教科書版の『桃太郎』と大日本帝国の拡張主義とのつながりについて、詳しくはAntoni, 1991, pp. 158–165を参照。

10

巖谷。鳥越、2004年、13頁での引用。

11

滑川、1981年、236頁。

12

京の薬兵衛、1895年、816–821頁。

## 新渡戸稲造と桃太郎と植民政策学

13

この論文は、「桃太郎遠征譚」というタイトルの講演をもとに書かれたものだが、そこには、桃太郎に対し、また国民的な意識を高めるために昔話を利用することに対し、新渡戸が長年関心を抱いていたのがよく表れていた。

14

『新渡戸稲造全集』第5巻、1969年、186頁。

15

同書、188頁。

16

同書、191-192頁。

17

『文明国民南下の大勢』、『新渡戸稲造全集』第4巻、1969年、471頁。

1907年、新渡戸稲造(1862-1933年)は、「桃太郎の昔噺」という論文を発表した<sup>13</sup>。新渡戸は、民話の昔話を語り直すというよりむしろ、標準版の物語から同時代の青少年向けの道徳的な教訓を引き出す。昔話は「吾人に精神的動機を与へ」ることができるのだから、教育者は「祖先伝来を受けて来た吾人の能力と、又た祖先伝来耳にし来つた教訓」を次の世代に伝えていかなければならない。『桃太郎』は子供が初めに聞かされる昔話であり、彼らの「脳裏に印像せられる」<sup>14</sup>。しかし新渡戸は、この昔話のより広い含意を大人も子供もとらえ損ねていると嘆く。この論文中で彼は、この物語の中にある重層的な意味—歴史的、道徳的、そして経済的な意味—を強調し、時代を超えて語り継がれたこの物語が20世紀の青少年に対して特別な関わりを持つのはどのようにしてかを示そうとしている。

新渡戸は、桃太郎のモデルが源為朝<sup>ためとも</sup>で、12世紀に為朝が伊豆諸島に島流しにされた事実に基づいて桃太郎の物語が作られたという滝沢馬琴の仮説に言及する。だが新渡戸はすぐさま、歴史が「具体的」、「客観的」であるのに対して、昔話は「代表的」、「主観的」だと述べる<sup>15</sup>。これに即するなら、桃太郎は、日本人の現実の歴史ではなく、むしろその前史を発見できるようなプリズムを与えてくれるのである。桃太郎が典型的な日本の民衆の英雄であるのに対して、新渡戸は逆説的にも、その起源が外国にあることを強調する。桃太郎の名前の由来である桃の原産地が日本ではないのと同じように、桃太郎は古代にマレーから日本に大挙してやってきた冒険心旺盛な人々（「もも(百)」には多数という意味もある）の具象化だというのである。桃太郎の家来の三匹の動物は、これらの人々の立場から考えると、彼らが征服して行軍に加えた古代の先住民族の社会を表している<sup>16</sup>。桃太郎が外国に起源を持ち、他の民族集団を吸収する許容力を持つことは、現代の日本民族が多数の異民族を同化する度量を持つことを示唆している。日本人は、遠い過去に多種多様な人々を同化したのと同様に、現在においては近代的な宗主国として、この成功を再現できるだろうというのだ。

新渡戸は、植民地化を行うに適した民族的な資質を定義するために、『桃太郎』の「歴史的な」意味を利用するその一方で、次にこの物語の「倫理的な」次元へと話を転じる。そもそも彼は、「男らしい」桃太郎が少年たちにとっての理想のお手本だと論じている。新渡戸はしばしば、性的差異の含みのある用語で植民地主義を言い表しており、この用語法によれば、日本人の植民者が男性で、植民地はこの男性に身を捧げる女性である。新渡戸はある論文で次のように書いている。「女子が妙齢になると赤い帯を欲しがるように、国家も亦発展すると赤道に領地を得んことを望むようになる」<sup>17</sup>。「赤い帯」と「赤道」には「赤」という同じ漢字が用いられている。伝統的に、若い女性は妊娠した時に赤い帯を締めることになっていた。新渡戸は日本を赤い帯をした少女になぞらえているが、他方で、

日本の植民地化が熱帯の肥沃な土地を孕ませ豊かにすると示唆してもいる。日本は今や「発展」した状態にあるのだから、こうした土地を「得ん」と望むというわけである。

桃太郎が男らしさとリーダーシップを体現するのに対して、彼の家来の三匹の動物は、智(猿)、仁(忠犬)、勇(雉)という儒教道徳を表す。雄々しい英雄が鬼を退治できるのは、これらの徳を授かっているからである。新渡戸は、この物語の「道徳的な」側面に宗教家や道徳家や教育家の注意を喚起し、鬼を屈服させる桃太郎の英雄的な行為を、近代都市の魔窟のようなスラムに入り込む救世軍の「兵士」の伝道活動になぞらえている<sup>18</sup>。日本でのキリスト教徒による社会改革において、都会のスラムに住む下層階級が、救済を必要とする未開人ととらえられたのと同様に、新渡戸の描く植民者は、日本の辺境に住む「鬼」を、文明化を要する野蛮人と見なす。植民地化は伝道的な社会活動の一形態であって、国家の境界線の外を対象領域とし、より優れた文明の一層の伝播として正当化される。国内の未開人を征服することで、国家は自己統制力があることを実証し、帝国主義の世界システムの中で他国を支配する能力を顕示するとされていたのである。

にもかかわらず、新渡戸にとって、桃太郎による鬼ヶ島征伐の寓意的な教訓のうちで主要なものは、「経済的な」意味を持つ。

僕は桃太郎遠征の昔噺を以て、正しく日本国民が海外に意を注いで奮進する精神を表したものと信ずるのである。而して鬼ヶ島とは、南洋諸島の総称である。日本が僅か八洲に止まつて居た時代は、八丈島が即ち鬼ヶ島で、為朝時代の鬼ヶ島は即ち八丈島であつた。…寧ろ其後は琉球を以て鬼ヶ島と称へなければなら無くなつた。されど又た琉球が一旦日本の領地となり、日本語も普及した以上は、モウ一層南方の島を鬼ヶ島と称すべき事となつた。一步を南方に進むれば、島猶ほ南に在り、鬼ヶ島の名称は日本人の南進と共に愈よ南に移り行く。明治二十八年迄は、台湾が即ち鬼ヶ島であつた。占領後十余年の今日も尚ほ鬼ヶ島のやうな感を以て、内地人は台湾を見て居る。言語風俗の異なる間は之れも止むを得ぬ、恐らくは今後五年乃至十年経つたならば、此の名は当らなくなつて、モウ一層南方の島を鬼ヶ島として、今日の桃太郎は遙かに遠き鬼ヶ島を指して遠征することになるであらう。又た鬼ヶ島の宝と云ふは、即ち熱帯の物産を指すのであつて、宝は「田から」なり。鬼ヶ島の宝は即ち熱帯地方の農産物を云つたことで、隠れ蓑、隠れ笠、福槌等を桃太郎が分捕して来たといふとは、即ち種々産物を本国に供給したことであらう<sup>19</sup>。

この長い一節中で、新渡戸は桃太郎の物語を、日本のマニフェスト・デスティニーの隠喩、つまり、日本が自己を拡張し、南島を征服し、その宝を奪わずにはいられない衝動の隠喩と解釈している。宝の奪取を賞賛に値する勇敢な行いと

18

『新渡戸稲造全集』第5巻、1969年、193-194頁。

19

同書、195頁。

20  
福澤諭吉『ひまのをしへ』、1871年。桑原、1996年、10頁での引用。

して掲げることで、新渡戸はまた、自由主義思想家・福澤諭吉が以前に打ち出していた見解に真っ向から異議を唱えてもいる。福澤は『ひまのをしへ』の中で、桃太郎が青少年の見習うべき人物像としては不適切だと非難していた。「もゝたろふが、おにがしまにゆきしは、たからをとりゆくといへり。けしからぬことならずや。たからは、おにのだいじにして、しまいおきしものにて、たからのぬしはおになり」<sup>20</sup>。福澤が民衆の英雄である桃太郎を盗人の悪者として扱っているのに対し、新渡戸は桃太郎を見習うべきお手本として扱う。というのも、桃太郎が「熱帯の宝」を奪取することで日本国家が豊かになるからである。

日本人の侵略の後それに抵抗して鬼がさらに南に向かって逃げるせいで、鬼の住む島の位置は時が経つにつれて変わっていく。新渡戸がこの物語を語っていた頃、日本は既に琉球(1879年)と台湾(1895年)を征服しており、領土を求めてさらに南に目を向けつつあった。桃太郎による征伐は、宝を奪取し、占領した島々の住民を同化しながら、絶えず南進を続ける大日本帝国の寓意として、世間一般に流布するようになる。トーマス・バークマンは、新渡戸の桃太郎像を貫く原理を、抑制不可能な拡張の理論、日本版の「マニフェスト・デスティニー」(桃太郎主義)と言い表している<sup>21</sup>。

21  
Burkman, 1995, pp. 180–181.

新渡戸は日本随一の国際主義者として卓越した経歴を持っていたが、日本の帝国主義と密接な関わりを持っていた。彼は若い頃、札幌農学校で農学を学び、北海道とその原住民の植民地化事業に加わった。1901年には、台湾総督府の民政長官であった後藤新平から、砂糖産業の復興のために招聘を受けた。砂糖産業は後に台湾の基幹産業の一つとなり、植民地統治のための主要な収入源となった。新渡戸は、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学とドイツのハレ大学、さらには京都大学で正式に国際政治学の研鑽を積んだ後、東京帝国大学で植民政策講座の初代の主任を務めた。彼は東京帝国大学と拓殖大学でこの新たな学問分野の基本的なカリキュラムを作り出し、大日本帝国において重要な役割を担うべき次世代の専門家たちを育成した。

植民政策学の創立を主導するかたわら、新渡戸は世界中の植民地制度の体系的な比較研究を行い、世界全体を視野に入れたこの枠組の内部に日本の植民地政策を位置づけた。この新たな学問分野の創出は、新興の大日本帝国を合法化し、またこの帝国が最新の学問知識に基づいていると示すのに重要な役割を果たした。この分野の創出が、帝国が国際的な規範の条件に従って建設された証となったのみならず、「日本の帝国を定義する国際的な条件に、権威ある学術的な説明を与えた」<sup>22</sup>のである。

22  
Dudden, 2004, p. 132.

新渡戸は植民政策についての後期の著作で、帝国の寓意として桃太郎には限界があり不完全だとしばしば指摘していた。桃太郎は鬼を征伐するが、その後日本にある自分の村に戻り、鬼には自分たちだけで好きにさせる。新渡戸は『桃太郎』を修正し、侵略者というよりむしろ、長期の定住者として桃太郎を

作り変えたいと思っていた。侵略者が新たな領土を併合してそこにある資源を領有するのに対し、定住者は植民地にとどまり、その資源を開発する。新渡戸は桃太郎を自分の理想に近づけるために、話の筋に新しい要素を付け加えてそれを実質上作り直すことで、もとの話に欠けているものを補うのである。1916年、新渡戸は次のように書いている。

僕は桃太郎の話が大好きで屢々このお伽噺を繰返したことがある。然るに新日本のお伽噺としては少しく之に修正が要ると思ふ。即ちその修正といふのは新日本の桃太郎は須く鬼ヶ島に行ったら、その到着地に土着して本国に帰らぬことである。宝の島に入りて宝を持って帰らぬので、爺婆を鬼ヶ島に呼び寄せ、その国土に於て己が一家の愉快なる発展を図るのである<sup>23</sup>。

23  
新渡戸(1916年)、2001年、276頁。

『桃太郎』を修正したいという新渡戸の意志は確かに偽りのないものだったが、桃太郎を平和的な定住者に変えることが本当にできたのだろうか。

### 悪者としての桃太郎と熱帯の楽園の発見

新渡戸が桃太郎を、日本の若者が見習うべき植民者のお手本と見なしたその一方で、芥川龍之介は短編小説『桃太郎』で、桃太郎が帝国主義の唾棄すべき象徴だと暴いて見せた。この小説の初出は1924年7月1日の『サンデー毎日』である。この小説の中で、芥川は桃太郎というこの理想の少年を侵略者として風刺し、鬼に平和的な島民の役を当てた。新渡戸が国定教科書に出てくる標準化された『桃太郎』に基づいてそこから教訓を引き出したのに対して、芥川はおとぎ話に特徴的なスタイル(例えば、「むかし、むかし、大むかし」という決まり文句)をリアリスティックな詳細の描写と組み合わせ、辛辣な批評を用いて風刺を生み出した。彼は標準版の『桃太郎』をよく知っている大人を読者として想定し、その物語をまるまる省略した。

この赤児を孕んだ実は深い山の奥を離れた後、どういふ人の手に拾はれたか？  
—それは今更話すまでもあるまい。谷川の末にはお婆さんが一人、日本中の子供の知つてゐる通り、柴刈りに行つたお爺さんの着物か何かを洗つてゐたのである。……<sup>24</sup>

24  
芥川、『芥川龍之介全集』第11巻、1996年、159頁。

その上に芥川は、それ以前の『桃太郎』文学、とりわけ巖谷小波や尾崎紅葉といった有名な作家の作品を茶化して用いた。芥川は巖谷と同様に、国家の象徴を身につけた桃太郎(彼は日の丸の扇を持っている)を持ち上げ、彼を天皇制イデオロギーに結びつけた(芥川は桃太郎の起源を『古事記』の天地開闢の神話にまで遡っている)。また尾崎と同様に、標準版の『桃太郎』の視点を逆にして、

鬼の立場から物語を語った。結局のところ、芥川の語りの斬新さは主として、桃太郎に対する徹底した偶像破壊的な態度にある。桃太郎が日本国家と同一視されるせいで、作家は読者に、日本の帝国主義に批判的な見方をして、それを被植民者の視点から考え直すように促すことになる。

芥川は主として話の基本的な要素を逆さにすることで、標準版の『桃太郎』をひっくり返した。桃太郎は、英雄というよりむしろ、富と権力への欲望に駆られた悪者なのである。物語に出てくる老父と老婆がどこにでもいる働き者の百姓だとすれば、桃太郎は何のとりえもない怠け者で、骨の折れる野良仕事から逃れるために鬼ヶ島征伐の旅に出る。「彼はお爺さんやお婆さんのやうに、山だの川だの畑だのへ仕事に出るのがいやだつた」<sup>25</sup>。芥川は桃太郎を怠け者として描くことで、粗忽な南洋島民を勤勉な日本人と対比するという、日本人のよく使う紋切り型のレトリックを逆転する。老父と老婆は、桃太郎を引き止めるどころか、彼を厄介払いしようとやっきになった。というのも、二人は「内心この腕白ものに愛想をつかしてゐた」のだから。桃太郎を送り出す時、彼らは「旗とか太刀とか陣羽織とか、出陣の支度に入用のものは云ふなり次第に持たせることにした。のみならず途中の兵糧には、これも桃太郎の注文通り、黍団子さへこしらへてやつたのである」<sup>26</sup>。老父と老婆にとって、桃太郎の海外遠征は、わがままで横着な子供に手を焼いているという彼らの問題に対する、願ってもない解決策だと見なされている。老夫婦が植民地の空間に対する都会人の見方を表しているとすれば、彼らはこの空間を、日本の社会的不適応者が行き着く吹き溜まりと見ているのである。

鬼ヶ島への旅の途中で、桃太郎は三匹の動物に出会い、彼らをうまく口車に乗せて自分のお供をさせる。その場面で、彼は人を操るのに長けたリーダーであり、はったりと悪知恵で自分の大義に人を巻き込む。自分の黍団子が「勿論実際は日本一かどうか、そんなことは彼にも怪しかつたのである」<sup>27</sup>が、彼はそうだと吹聴する。彼はまた抜け目のない商売人で、家来の動物たちが彼のために働きたいと申し出ると、算盤を取り出して懸け引きをする。桃太郎は、自分だけが黍団子を持ち有利な立場にあることを最大限に利用して、ほうびを黍団子一個から半分にまけさせる。彼は動物たちから信頼と忠誠を得るといふより、彼らがだまされやすく腹をすかせているのにつけこむことで、彼らを従える権力を手に入れる。

三匹の動物は儒教道徳の模範というよりおそらく、怒り、貪り、無知という三毒の寓意的な表象である。仏教の教えによれば、これらの三毒が我々のあらゆる不幸の源泉なのだ。野良犬は仁の徳ではなく怒りを表し、小賢しい猿は貪りを、雉は勇の徳よりむしろ無知を表す。これら三匹の動物は、あからさまに互いを嫌っていて絶えずいがみ合う。犬は大きな牙をむき出しにして意気地のない猿を脅し、計算高い猿は役立たずの雉をひたすら軽蔑し、「地震学などにも

25  
同書、159頁。

26  
同書、159頁。

27  
同書、160頁。

通じた」<sup>28</sup>雉は頭の鈍い犬を見下している。にもかかわらず、たけり狂った犬が猿に襲いかかると、雉が行司よろしく止めに入り、「犬をなだめながら猿に主従の道徳を教」<sup>29</sup>える。結局のところ、手に負えない子分たちに桃太郎がどうにか言うことを聞かせるのは、型通りの天皇制イデオロギーのお説教によってではなく、彼らに戦利品の分け前を約束することによってである。

喧嘩ばかりとはいえ、鬼ヶ島までの旅路ではどうか集団として節度を保っていた動物たちは、目的地に着くと本物の怪物に変貌する。桃太郎は片手に桃の旗を持ち、もう一方の手で日の丸の扇を振りながら、自分の子分たちに略奪・強盗をほしのままにさせる。「進め！ 進め！ 鬼といふ鬼は見つけ次第、一匹も残らず殺してしまへ！」ろくに食べ物も与えられずいように誘導されて、家来の動物たちは凶暴さをあらわにする。とはいえ、こうなるのも想像に難くない。「饑<sup>う</sup>ゑた動物ほど、忠勇無双の兵卒の資格を具へてゐるものはない筈である」から。犬はその牙で鬼の若者を真つ二つに噛みちぎり、雉は鬼の子供の目玉をつつき出し、猿はおそらく「我々人間と親類同志の間がらだけに」、鬼の娘を絞め殺し、その前に「必ず<sup>ほしま</sup>陵辱を恣にした」<sup>30</sup>。新渡戸はその論文中で植民地化を隠喩的な強姦として扱っていたが、芥川の小説に出てくる強姦には隠喩的などころは一つもない。実際、ある批評家によれば、桃太郎の残虐な侵略行為は、南京の強姦を予言的に先取りしている<sup>31</sup>。この小説では、鬼のような悪者はまぎれもなく、桃太郎と彼に加担する三匹の動物である。

対照的に、この小説の描く逆転した世界の中では、鬼たちの方が人間らしい。この小説には、桃太郎が侵略してくる以前に、鬼たちが平和に仲良く楽しく暮らしている様子が描かれている。人間の子供に鬼の恐ろしさが教えられるのと全く同じように、鬼の子供は、言い伝えに出てくる人間界の邪悪さを言い聞かせられる。髪<sup>う</sup>の白い鬼の母は、自分が守りをする孫たちに教えさす。「お前たちも悪戯をすると、人間の島へやつてしまふよ。人間の島へやられた鬼はあの昔の酒顛童子のやうに、きつと殺されてしまふのだからね。え、人間といふものかい？ 人間といふものは角の生えない、生白い顔や手足をした、何ともいはず気味の悪いものだよ。おまけに又人間の女と来た日には、その生白い顔や手足へ一面に鉛の粉をなすつてゐるのだよ。それだけならばまだ好いのだがね。男でも女でも同じやうに、嘘はいふし、慾は深いし、焼餅は焼くし、己惚は強いし、仲間同志殺し合ふし、火はつけるし、泥棒はするし、手のつけやうのない毛だものなのだよ……」<sup>32</sup>。ここでは視点の変化により、植民者の抱くステレオタイプが逆方向に投影されている。植民者の語り<sup>う</sup>が、植民地化された他者を非人間的なものとして扱うとすれば、芥川は、被植民者の目に植民者がどんなふう<sup>う</sup>に野蛮な獣として写っているかを示してみせる。

だが、芥川の『桃太郎』は、人間の普遍的な過ちについての寓意であるにとどまらない。新渡戸が民話の中に、彼と同時代の日本に関わる重層的な意味を

28  
同書、160頁。

29  
同書、161頁。

30  
同書、163-4頁。

31  
1937年12月13日、当時中華民国の首都であった南京に日本軍が攻め入った時、彼らは町の住民を虐殺し始め、それは六週間にもわたって続いた。殺された中国人は推定30万人とされる。この残虐行為に責任のある兵士たちのほとんどが、日本の貧しい農山村から召集された純朴な新兵であった。芥川の小説と南京の強姦の類似性については、中村青史、1982年、84頁を参照。

32  
『芥川龍之介全集』第11巻、1996年、163頁。

発見したのと同様、芥川は自分の小説を彼の時代の日本の帝国主義に対する辛辣な風刺にすべく、リアリスティックな詳細の描写を加えた。桃太郎が日本の帝国主義を象徴しているとすれば、家来の動物たちは、この帝国主義を支える様々な社会集団、すなわち、戦争を煽る軍部、資本家、道を誤った知識人を表している。犬は軍部の中の拡張主義の支持者たちを表す。これは帝国が新たに獲得した空間の中で自律的に活動した重要な社会集団で、殊に彼らの活動の舞台となったのが、後に関東軍が満州事変を画策することになる中国であった。この小説の初期草稿には、「桃太郎の本国へ帰つた後、鬼が島の知事になったのは武断主義の犬である」という記述があり、これはおそらく、日本の植民地を支配したのがすべて武官だったという事実に言及するものである。犬は知事として、桃太郎の家来の誰にも角がない以上、「今後角を生やしてゐる鬼は死刑に処す」という布告を出す<sup>33</sup>。猿が象徴される第二の集団は、さらなる拡張を必要とする経済的利権を代弁している。猿が鬼ヶ島征伐に行くのをやめそうになると、桃太郎はこう釘を刺す。「では伴をするな。その代り鬼が島を征伐しても、宝物は一つも分けてやらないぞ」<sup>34</sup>。そのせいで、猿は考え直さざるをえなくなる。最後に、雉は帝国のさらなる拡張を要求する知識階級を表していた。面白いことに芥川は、雉が「地震学などにも通じ」ていたと述べている。この物語が出版されたのは、1923年の関東大震災の一年後だが、地震学者は誰もこの災害を予知できなかった。日本の民間伝承では、雉(と鯰)の異常行動は地震が差し迫っていることの前兆だと見なされていた。芥川は、自分の小説に出てくる雉を科学者にすることで、そうした迷信を鼻で笑い、科学としての地震学の地位とこの学による地震予知の企てを揶揄している<sup>35</sup>。芥川の風刺においては、これらの様々な集団の正体が犯罪者の集まりであることが暴露される。彼らの言葉からイデオロギーによる粉飾を剥ぎ取れば、それは単に略奪を正当化するものにすぎない。

しかし、芥川のこの小説が同時代の植民地主義をパロディにするのに用いているもう一つの方法がある。この小説の舞台である。標準的な説明では、鬼は岩だらけの島にある難攻不落の砦で守りを固めた獰猛な戦士であるのに対して、芥川の描く鬼は遠い熱帯の島で暮らしており、外界から隔絶されているという以外には自分たちの身を守るすべを持たない。

鬼が島は絶海の孤島だつた。が、世間の思つてゐるやうに岩山ばかりだつた訳ではない。実は椰子の聳えたり、極楽鳥の囀つたりする、美しい天然の楽土だつた。かういふ楽土に生を享けた鬼は勿論平和を愛してゐた。いや、鬼といふものは元来我々人間よりも享乐的に出来上つた種族らしい。瘤取りの話に出て来る鬼は一晩中踊りを踊つてゐる。一寸法師の話に出て来る鬼も一身の危険を顧みず、物詣での姫君に見とれてゐたらしい。…

33

『芥川龍之介全集』第21巻、1997年、406頁。

34

『芥川龍之介全集』第11巻、1996年、161頁。

35

『桃太郎』における社会風刺の分析としては、Yu, 1972, pp. 52-53を参照。

鬼は熱帯的風景の中に琴を弾いたり踊りを踊ったり、古代の詩人の詩を歌ったり、頗る安穩に暮らしてゐた。その又鬼の妻や娘も機を織つたり、酒を醸したり、蘭の花束を拵へたり、我々人間の妻や娘と少しも変わらずに暮らしてゐた<sup>36</sup>。

36

『芥川龍之介全集』第11巻、1996年、162頁。

芥川は南洋熱の時代にこの物語を書き、その舞台を南洋の熱帯の島に設定する。新渡戸が後進的で怠け者という熱帯の島の住人についてのステレオタイプを持ち出すのと同様に、芥川はお決まりの熱帯のイメージ(椰子の木や実、極楽鳥、蘭、美しい月明かり、バナナ)を用いて、自分の物語に出てくる南の島を熱帯の楽園として描き、酒好きで色好み、子供のような娯楽をこよなく愛する鬼に、屈託のない生き物の役を当てる<sup>37</sup>。このロマンティックな原始主義において、鬼は現在よりも純潔で天真爛漫だった過去と結びついた価値を具現していて、今日の日本人はこの過去からはるかに遠く隔たってしまった。芥川の中編小説『河童』と同じく、『桃太郎』は、人間に照らし合わせながら鬼を理想化して描き出す寓話であり、そこでは鬼が人間社会を批判するために用いられる。新渡戸の論文に出てくる鬼が、文明を持たない点によって特徴付けられているのは異なり、芥川の描く鬼ヶ島の住人たちは心の充足というものを知っている—そのような充足を欠いているのはむしろ桃太郎と彼の子分たちであり、だからこそ彼らは強欲で飽くことを知らない。以上のことに即せば、芥川は、植民地主義への批判を行うために二段構えの技法を用いている。一つには、言い伝えに出てくる日本の英雄(桃太郎)という人物像の化けの皮を剥ぎ、二つ目には、鬼の社会をユートピアとして理想化するのである。理想化された他者は、日本人の欠点と対照をなしそれを際立たせる働きをしている。

37

1914年に行われた、ミクロネシアについて日本が行った最初期の調査には、島民たちが「怠惰」で「性的放縱」という記載があった。坂野、2005年、357頁を参照。

植民政策学の教授として、新渡戸は植民地化を文明の普及と日本民族の海外進出と考えていた。芥川にとって、植民地化は徒労にすぎない。結局のところ、南島の征服によって桃太郎が得る見返りは少なく、島民たちの利益はさらに少ない。桃太郎は、鬼の子供に引かせた荷車に一杯の宝を持って、意気揚々と故郷に凱旋するが、戦勝の英雄がそれ相応に期待するような幸福な余生を送るわけではない。人質になった鬼の子供が大きくなると、桃太郎の番人の雉を殺して、安心して暮らせる自分の島に逃げ帰る。鬼ヶ島で生き残った鬼たちは復讐に燃え、海を渡ってやって来て、桃太郎の屋敷を襲い火を放ち、猿を殺す。悪夢のような出来事の繰り返しに苛まれ、桃太郎は忠実な犬にこう漏らす。

「どうも鬼といふものの執念の深いのは困つたものだ。」

犬も相槌を打つ。

「やつと命を助けて頂いた御主人の大恩さへ忘れるとは怪しからぬ奴等でございます。」<sup>38</sup>

38

『芥川龍之介全集』第11巻、1996年、165頁。

とどのつまり、植民者である桃太郎は完全な思い違いをしていて、自分自身の行動がどれほど被植民者たちを刺激して、自分への反感から彼らを団結させることになるか、分かっていない。桃太郎は、自分が傷つけた被害者が征服を歓迎し、この無私的行為に「大恩」を感じてくれるのではないかと期待していて、そのせいで鬼たちの「忘恩」や「執念深さ」を目の当たりにして悲嘆にくれる。だが、芥川が示唆しているように、それはただ、平和を愛する享乐的な鬼たちが、彼らのユートピアである島が桃太郎の強盗団に破壊された後に、「復讐の鬼」になるということではしかない。

芥川の風刺はまた、桃太郎がはからずも暴力の連鎖を発動させ、それが征服者の打倒と島の脱植民地化につながるということを示唆してもいる。植民地の征服は、征服された人々の「民族的な」意識を呼び起こし、独立への欲求を目覚めさせ、彼らを隷属させる権力に抵抗するよう駆り立てる。鬼の若者は、桃太郎のやり口に学んで、手近にある材料を使って自前の武器を作り、「独立」のために戦う。

その間も寂しい鬼が島の磯には、美しい熱帯の月明りを浴びた鬼の若者が五六人、鬼が島の独立を計画する為、椰子の実に爆弾を仕こんでみた。優しい鬼の娘たちに恋をすることさへ忘れたのか、黙々と、しかし嬉しそうに茶碗ほどの目の玉を<sup>かがや</sup>赫かせながら、……39

語りが一段落するところに出てくるイメージ—島の娘たちの愛らしさに目もくれず、椰子の実をくり抜いてその殻に爆弾を仕込む若者の姿—は、植民地の征服がもたらす毒の果実である。この征服のせいで、南の島がもとの熱帯の楽園に戻ることは全く不可能になる。桃太郎による征伐の結果として、若者は屈託のない生活を捨ててストイックな戦士になってしまった。「優しい鬼の娘たちに恋をすること」で心を乱すことはもはやない。芥川は要するに、プロバガンダ的な桃太郎の人物像を逆立ちさせるのだ。桃太郎の南進の正体が、ありがたいお恵みの仮面をかぶった残忍な征服と搾取であることが暴かれる一方で、徐々に進む「鬼」の同化に、抵抗と解放の物語が取って代わる。芥川の風刺はつまるところ、民話が両刃の剣であることを示している。民話は、日本の帝国主義の政治的なデマゴグのための武器にもなれば、そのデマゴグの議論を風刺しようとする者のための武器にもなるのである。

芥川は、椰子の実爆弾を組み立てる鬼の場面で物語を終らせはせず、むしろ物語の始まりに戻る。芥川の小説は神話に出てくる桃の木から始まっていたのだが、その桃の木は一万年に一度だけ桃太郎のような「天才」を生み出すのだという。物語の最後で芥川は、同じ木の枝に実る他の桃について思いをめぐらせている。「人間の知らない山の奥に雲霧を破つた桃の木は今日もなほ昔のやうに、累々と無数の実をつけてゐる。…未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも

知らずに眠つてゐる」<sup>40</sup>。これら「未来の天才」が生まれるのには何千年も、いや何百年さえもかからない。彼らは芥川の小説が出版された後の20年間に、戦時下に発行されたおびただしい量の絵本や漫画や宝塚歌劇、ポスターや歌やアニメーションの中で解き放たれた。後に現れることになる桃太郎のこうしたアバターに対し、芥川は警鐘を鳴らし、そうすることで、侵略や戦争を促進し帝国を増長させるために桃太郎の人物像を濫用すべきではない、と我々に警告している。

#### 参考文献

- 芥川龍之介「桃太郎」、『芥川龍之介全集』第11巻、岩波書店、1996年、158-166頁。
- 芥川龍之介「桃太郎」草稿」、『芥川龍之介全集』第21巻、岩波書店、1997年、406頁。
- 京の藁兵衛「今桃太郎」(下)、『少年世界』第1巻第8号、1895年、816-821頁。
- 桑原三郎『福澤論吉と桃太郎—明治の児童文化』、慶應義塾大学出版会、1996年。
- 志賀直哉「暗夜行路」前篇、『志賀直哉全集』第7巻、岩波書店、1955年。
- 田山花袋「蒲団」、『田山花袋全集』第1巻、文泉堂書店、1973年、521-607頁。
- 土屋忍「文学における「土人」—中河與一と村上龍—」、河村湊編『戦後という制度』文学史をよみかえる5、インパクト出版会、2002年、254-275頁。
- 鶴見祐輔『南洋遊記』、大日本雄弁会講談社、1917年。
- 鳥越信『桃太郎の運命』、ミネルヴァ書房、2004年。
- 中村青史「桃太郎論」、『方位』第4号、1982年、75-85頁。
- 夏目漱石『彼岸過迄』、新潮文庫、1952年。
- 滑川道夫『桃太郎像の変容』、東京書籍、1981年。
- 新渡戸稲造「文明国民南下の大勢」、『新渡戸稲造全集』第4巻、471-478頁、教文館、1969年。
- 新渡戸稲造「桃太郎の昔噺」、『新渡戸稲造全集』第5巻、186-196頁、教文館、1969年。
- 新渡戸稲造「大和民族の発展」、拓殖大学創立百年史編纂会『新渡戸稲造—国際開発とその教育の先駆者』、拓殖大学出版会、272-281頁、2001年。
- Antoni, Klaus. "Momotarō and the Spirit of Japan: Concerning the Function of a Fairy Tale in Japanese Nationalism in the Early Shōwa Age" in *Asian Folklore Studies* 50:155-188.
- Burkman, Thomas W. "The Geneva Spirit." In *Nitobe Inazō: Japan's Bridge across the Pacific*, ed. John F. Howe. Boulder, CO: Westview Press, 1995, pp. 177-214.
- Dudden, Alexis. *The Japanese Colonization of Korea*. New York: Columbia University Press, 2004.
- Shimizu Hajime. "Nanshin-ron: Its Turning Point in World War I" in *The Developing Economies* XXV-4, December 1987, 386-402.
- Yu, Beongchen. *Akutagawa: An Introduction*. Wayne State University Press, 1972.

